

コリント人への手紙第一12章 「御霊の一致と多様性」

1A 御霊の現れ 1-11

1B イエスを主とする聖霊 1-3

2B 御霊の賜物 4-11

1C 同じ与える方 4-6

2C 賜物の分け与え 7-11

2A からだの多くの部分 12-26

1B 御霊によるバプテスマ 12-13

2B からだに属する部分 14-18

3B 欠かせない弱い部分 19-22

4B 配慮し合う部分 23-27

3A 神の備えた人々 27-31

1B 偏らない賜物 27-30

2B よりすぐれた賜物 31

本文

コリント人への手紙第一 12 章を開いてください。私たちは、11 章から教会の公の礼拝における秩序の問題について見えています。女性が、預言や祈りをする時にコリントの人たちは被り物をしていないということ。また、主の晩餐、聖餐について、一部の人々だけが食べて、貧しい人たちが恥ずかしい思いをし、主の死なれたことを覚えていなかったということを見ました。

そして 12 章から 14 章にかけて、御霊の賜物について、パウロが細やかに指導しています。コリントには、御霊の賜物が豊かに現れていたことを、パウロは手紙の挨拶にこのように書いています。「1:6-7 キリストについての証しが、あなたがたの中で確かなものとなったからです。7 その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることがなく、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望むようになっていきます。」けれども、御霊の賜物が豊かに与えられていた彼らは、賜物を適切に用いることなく、濫用していた傾向がありました。特に異言の語るのを、時と場所をわきまえずに行っていたので、礼拝の秩序に支障をきたしていました。

パウロは、ずっとコリントの人たちに、知恵とか知識と言われているものを誇っていても、それが必ずしも神からのものではなく、この世の知恵があるということを話していました。キリストにこそ、知恵と知識が隠されています。同じように、超自然的な現象が起こったからと言って、それが御霊によるものとは限らないのです。いや、もっと正確に言うと、御霊の現れは確かに、イエス・キリストを証ししていて、それはすばらしいのです。しかし、もっと大事なことがある。それは愛であって、愛

が、他の人の利益を求め、その人を育て上げるのであり、あなたがたは大人に成熟してほしいと、パウロは願っています。

私たちも、キリスト教会の中で、知恵や知識と呼ばれているものを追い求める傾向がありますね。ユーチューブ動画などで、自分の教会ではいかにいろいろな情報が流れています。また、癒しや奇跡など、著しく起こっている教会もあります。これらはすべてすばらしいものなのです。けれども、もっと優れた道がある…これが、パウロの教えたいことです。

1A 御霊の現れ 1-11

1B イエスを主とする聖霊 1-3

¹さて、兄弟たち。御霊の賜物については、私はあなたがたに知らずにいてほしくありません。

御霊の賜物について、とありますが、御霊のことについて、とギリシア語には書いています。このことについて、知らずにいてほしくないと言っています。パウロは、他の手紙でも、この表現、「知らずにいてほしくありません」という言葉を使っています。ロマ書 11 章で、こう言っています。「11:25-26 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えるようにするために、この奥義を知らずにいてほしくありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。」神の、イスラエルの救いについてのご計画です。そして、テサロニケ第一 4 章では、こう言っています。「4:13 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。」この後で、主が天から降りて来られて、先に死んでいった信者を神がよみがえらせてくださることを話しています。そして生き残った私たちは、彼らと一しょに雲に包まれ引き上げられ、空中で主と会うと書いてあります。つまり、教会の携挙と復活のことです。

そして、今の教会の状況を見ますと、見事にパウロが知らないでいてほしくないと言っていることが知られていません。イスラエルについては、もう神の救いのご計画にとって大切なことではないのだ、今はすべての民に対する福音なのだから、ということですが、それは何時までも続くのではなく、異邦人の満ちる時までなのです。そして、主が天から降りて、戻って来てくださることについて、眠った者がよみがえり、教会が携挙されることについても、「終末や、携挙についてのことは意見が分かれる、これは分からないことにしないといけない。」として、教えない傾向があります。そして、ここ御霊の賜物についてです。聖霊の働きについても、論争する傾向があります。異言については、特にそうです。そこで、聖霊の賜物のことについては知らないままているのが得策だ、と思っているのです。けれども、聖書は、そういうことについてこそ、「知らないでいてほしくない」と教えているのです。

² ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました。³ ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

コリントの人たちにとって、御霊についてのことはいろいろと知らないことがあるのだよ、とパウロはここで言っています。なぜなら、信じる前のこと、異教徒であった時は、神に語られるということは実はなかったのだ。ものを言えない偶像のところに連れていかれただけで、初めて聖霊によって、神が語られることをあなたがたは知ったのです、ということを行っています。当時の異教の習慣で、神々の行進というものがありました。祭司を先頭にして、人々は行列をなして歩いていき、そして偶像を拝みました。使徒の働きで、リステラで、パウロが、足なえの人を立ち上がらせた奇跡をおこなったので、彼らはバルナバをゼウス、パウロがヘルメスの神なのだとし、ゼウス神殿の祭司が、雄牛と花輪を持って来て、群衆といっしょにいけにえを献げようとしていました(14:8-13)。こうした習慣があったのです。けれども、その先は物の言わない偶像だったのです。

ギリシア宗教の「神託」という語りかけは、確かにありました。けれども、10章の偶像の宮でのさげ物は、悪霊との交わりなのだとおっしゃったように、神託ではあく、悪霊からの語りかけだったのです。そして、当時は呪いの言葉がかなり徹底的に広まっていた。呪いをかけている碑文が、コリントで発見されていて、スポーツの競技相手、恋がたき、訴訟の相手、商売がたきなどに、神々の呪いをかけるのです。こういった形で、異教を背景に持っているコリントの人たちは、神の御霊についてのことは知らなかったし、混乱していたのです。語りかけがあったといっても、そういった異教の背景から物事を判断していました。パウロは、14章でこのように言っています、「兄弟たち、考え方においては子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。(20節)」

そこでパウロが、明確にしているのは、聖霊の働きには、イエスを主とする証しから始まるのだということです。「聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。」と行っています。イエスが主であると言い表して、この方に従うようにさせるのが聖霊の働きです。「神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく」とも行っていますが、異教の中では呪いの祈りがあまりにも多いので、イエスは呪われよ、という言葉さえも、御霊によるものなのか、神からのものなのかと勘違いしてしまっていたのです。

聖霊の働きは、「イエスが本当に生きておられる。この方はリアルなのだ。」と明らかにされることです。「ヨハ 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証してくださいます。」私たちは、正しい教えを聖書から学び、イエス様について正確に知ることは可能です。けれども、それが必ずしも、自分がそこに生きている

とは違います。聖霊こそが、イエスが主であられて、私の生活と人生の主導権を握っておられるという証しをしてくださるのです。

2B 御霊の賜物 4-11

1C 同じ与える方 4-6

⁴ さて、賜物はいろいろありますが、与える方は同じ御霊です。⁵ 奉仕はいろいろありますが、仕える相手は同じ主です。⁶ 働きはいろいろありますが、同じ神がすべての人の中で、すべての働きをなさいます。

イエスが主であるという証しから始まる、聖霊の働きですが、パウロはこれから、「同じ御霊から、いろいろな賜物の現われがある」という話を掘り下げていきます。パウロが、この手紙の初めの4章を、仲間割れ、分派の問題に費やしたことを思い出してください。そこでも、パウロも、アポロも、ケファも、すべてが神のしもべであり、いろいろな働きがあっても、同じ神に仕えていることを教えていました。御霊の現れ、賜物も同じだということです。私たちはどうしても、自分を安心させるために、似た者同士で付き合いおうとします。そして、壁を作ってその安心できる空間を守ろうとします。自分の理解できない異なることをやっている人を見たら、彼らは自分の仲間ではないとか言って排除したり、彼らは神に従っていないとか言って、裁いたりします。しかし、私たちの神は、多様性のある方です。その御霊の現れもいろいろなのです。

「賜物」というのは、神の一方向的な恵みよって、神にお仕えするための力と言い方えたらよろしいでしょうか。御霊がその賜物をくださいます。次に、「奉仕」です。これは、使徒、預言、牧者や教師の働きなど、それぞれ、神にお仕えする時の務めです。その務めを与えられるのは、主キリストご自身であって、もちろん、同じ主です。そして、同じ奉仕の中にも、いろいろな形での働きがあります。同じ使徒でも、パウロは異邦人に対する使徒、ペテロはユダヤ人に対する使徒でした。その語っている教えは、あたかも正反対のように感じる場合があります。例えば、ヤコブの、行いによって義と認められるという教えと、パウロの、行いではなく信仰によって義と認められるというのは、まるで違うように見えます。けれども、よく読めば同じことを語っています。それを証明しているのは、エルサレムにおける会議です。パウロによる、異邦人の中での神の恵みを、ペテロも、ヤコブも神からのものと認めています。これらの働きをなさっているのは、同じ父なる神です。

興味深いのは、賜物については同じ御霊が、奉仕については同じ主が、働きについては同じ神がと言っていること、三位一体の神が動かしておられるということです。神ご自身の中に多様性があるのです。同じ神ですが、父、子、御霊の交わりがあって一つになっています。ですから、私たちが一つになるという時、画一的にみなと同じになるということではなく、むしろ、それぞれに与えられた賜物、奉仕、働きがいろいろあって、それでいて一つになっているということです。

2C 賜物の分け与え 7-11

⁷ 皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです。

ここで大事なのが、「皆の益となる」ということです。ここが、コリントの人たちの考え、また私たち現代社会に生きている人々の考えと正反対です。コリントの人たちは、自分たちの願い、自分の自由、自分の好みという、自分の利益を求めかたちで賜物を求めていました。私たちも、自己実現というかたちで、賜物をとらえる傾向があります。私には何ができるのかしら？と、自分の性格発見、能力発見をしようとします。けれども、能力をもってそれで何をするのでしょうか？主を愛して、教会を愛していることで心がいっぱい、それで神が恵みによって分け与えてくださるのが賜物です。そもそもが、イエスを主としているという、自分が中心ではなく、しもべとして仕えているということが前提です。

⁸ ある人には御霊を通して知恵のことばが、ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。⁹ ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、¹⁰ ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。¹¹ 同じ一つの御霊がこれらすべてのことをなさるのであり、御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。

九つの賜物が列挙されていますが、ギリシア語の言葉によって、三つに大別することができます。一つは、知恵や知識に関する賜物。知恵のことばと知識のことばです。もう一つは、信仰、いやし、奇跡、預言、そして霊を見分ける力です。三つ目は、異言と異言の解き明かしです。この賜物一つ一つについて、じっくりと学んだ「聖霊シリーズ」がロゴス・ミニストリーのサイトにありますので、ぜひ聞いてみてください。¹

ここで大事なのは、「御霊を通して」という言葉が繰り返されていることです。そして、11 節で、「御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。」とあり、御霊が主権をもって、一人ひとりに賜物を与えられるということなのです。御霊というと、何かほわっとした気持ちであるとか、感覚であるとか考えたら大間違いです。自分の神への奉仕、その賜物を決めるのは自分ではなく、御霊ご自身だということです。自分がそう感じなくとも、そうだと御霊が決めておられるのです。

チャック・スミスは、教団の中にいた時に、教会の使命は伝道であると教えられていたので、伝道者になろうとしました。ある時には、奥さんの勧めで説教壇から左右に動いて語るべきだと言われたけれども、動いたら、自分が何を語るか分からなくなり、頭が真っ白になってしまったとも言っ

¹ http://www.logos-ministries.org/topic_b.html

ています。神のみこころによって、伝道者ではなく、牧者また教師になっているのだとして、自分を受け入れました。それでよいのだと。自分がこれになりたいと思っていたけれども、御霊のみこころのままに、与えられた賜物に留まることが良いとしたのです。

また、「同一の御霊によって」という言葉も繰り返しています。自分が知っているような働き、賜物ではないと、「これは聖霊によるのではない」と、私たちはすぐに裁いてしまいます。そうではなく、同じ御霊がそれをしておられるのです。

2A からだの多くの部分 12-26

そこでパウロは、キリストのからだの話を始めます。御霊がいろいろな賜物をそれぞれに与えていることによって、むしろ、配慮し合うことで一致する、身体の機能と同じなのだと教えます。

1B 御霊によるバプテスマ 12-13

¹² ちょうど、からだが一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

教会は、個々人が寄せ集まっているところではありません。そうではなく、各人が神に召されて一つになっているという、キリストにある不思議な結びつきがあります。全然違うので、自分たちがどうして一つになれているのかが不思議でもあるし、また自分たちが一つだから、では同じかと思ったら、いろいろな働きをしています。これが、まさに身体と同じなのです。からだは一つだとしても、多くの部分があります。けれども、からだの部分が多くあっても、絶妙に一つのからだとして機能しているのです。違うようで同じであり、同じなのに違うという、多様性の中の一致なのです。

¹³ 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。

ここに、とても大切な御霊の働きがあります。私たちは、信じる者が御霊によって新たに生まれることを知っています。イエス様がニコデモに、「まことに、まことに、あなたがたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われました(ヨハ 3:3)。肉によって生まれたけれども、霊は神から罪によって離れています。けれども、罪を取り除くキリストの十字架における働きによって、罪が清められます。そこに御霊が与えられ、私たちは神に生まれた者となります。ここまでは、しばしば教会で強調されていることです。

けれども、それだけでなく、御霊によってキリストのからだとなるという働きもあるのです。「バプテスマ」とありますが、これは浸るという意味で、キリストのからだの一部になるという意味です。つまり、御霊によって神と結びついただけでなく、御霊によってキリストにあって、他の人びとと結び

ついたので。ここに、「ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も」とあります。これは、ローマ社会においては、相当の違い、壁でした。ユダヤ人とギリシア人の違いは、日本人とアメリカ人の違いよりも、はるかに大きなものです。まず、ユダヤ人には食物規定がありますから、同じ食卓につくことができないのです。そしてローマ社会は圧倒的な奴隷の多い社会で、奴隷は主人の所有物です。それだけの違いを、一つのからだとして結びつけるのが、御霊によるバプテスマです。

ですから、自分がイエス様によって天国に行けるのだというだけ考え、それに加えて教会に連なるというように、教会生活を付け足しのように考える人々があまりにも多いですが、それはコリント式の、個人主義の強い考え方であっても、聖書の教えている救いではないのです。キリストによる神の救いを信じる者は、そのままキリストのからだの一部に御霊によって入ったのです。

ところで、この箇所を、使徒の働き 1 章にある、イエス様が約束された聖霊のバプテスマと同じものとして教えている人々がいます。「1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」けれども、バプテスマという言葉が同じだけで、内容は違います。イエス様は言いかえて、「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます・そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」と言われました(1:8)。イエスの証しのための力を、聖霊の中に浸されることによって与えられる、ということです。キリストのからだの一部になるという御霊の働きが一つあり、聖霊の力によってイエス様を力強く証しするという、イエス様のお働きがもう一つあるのです。そもそも、主語が違いますね。キリストのからだに私たちが浸されるのは、御霊ご自身です。そして、キリストの証しをするために聖霊に浸すのが、イエスご自身です。イエス様が、証しのための聖霊のバプテスマを授け、御霊が、キリストのからだに入るバプテスマを与えられました。

2B からだに属する部分 14-18

¹⁴ 実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています。¹⁵ たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。¹⁶ たとえ耳が「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。

いろいろな部分があるということを知らずに、私たちはしばしば、過ちを犯します。その一つは、他の人びとの姿や働きを見て、自分にはそれがないので、自分にはこの教会には居場所がないと思ってしまうことです。そのことがいかに滑稽であるかを、耳が、自分は目ではないから、からだに属さないという言葉でよく言い表しています。自分が御霊によって、キリストのからだに入るバプテスマを受けたのですから、すでにその一部なのです。自分がこれからその一部に入っていくのだ、ということではなく、すでに一部であり、それを神が明らかにしてくださいませ。

¹⁷もし、からだ全体が目であつたら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が耳であつたら、どこでおいを嗅ぐのでしょうか。¹⁸しかし実際、神はみこころにしたがつて、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました。

もし、自分があの人たちのように奉仕ができない、自分にはそうした賜物がないと言っているのであれば、それは、まるで「からだ全体が目」「からだ全体が耳」というような姿を実は理想とと思っているという滑稽なことを考えているのです。自分自身が、その働きや賜物とは異なっているものが、神から与えられているということに気づくべきですね。

3B 欠かせない弱い部分 19-22

¹⁹もし全体がただ一つの部分だとしたら、からだはどこにあるのでしょうか。²⁰しかし実際、部分は多くあり、からだは一つなのです。

私たちが、一つの部分だけを見ていることの過ちがここにありますね。一つの賜物だけ、一つの働きだけを見ていたら、からだの広がり、その大きさを見失っています。賜物ばかりを見ていると、キリストのからだとしての全体像が見えなくなっていくます。自分の見ているものがすべてではないのだ、とすることがとても大事です。

²¹目が手に向かって「あなたはいらない」と言うことはできないし、頭が足に向かって「あなたがたはいらない」と言うこともできません。²²それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです。

手よりも目が目立ちます。足よりも頭が目立ちます。そこで目立つほうが、目立たないほうにむかって、「あなたは要らない」と言ったらどうでしょうか？これが、能力重視の競争社会で起こっていることですが、教会の本質は身体なのです。つまり、弱く見える部分がかえって、なくてはならないものです。手は要らないと目が行ったら、またたくまに手無しの身体になり、目がいくらあっても、不十分になります。そして、足なしの頭というからだになり、瞬く間に不自由になるのです。

午前礼拝でお話ししましたが、私が嫌いな言葉は、「この教会」という言葉です。「この教会は、何々が足りないね。」と批評します。自分はそれでいて関わらない、あるいは関わっても、自分が人々の上に立たないと何もしないという人たちがいます。自分がその教会の一部なのに、まるで自分がその上にいて、見下ろして、結局、この人たちはからだに属さないとしていることです。教会を、まるで会社のような能力の寄せ集めのように考えている人に、この傾向が強いです。

ここもまた、賜物を中心に動いているのが問題です。必ず他の弱く見える人々を排除していくようになります。または、目立つ部分だけが働いていて、他の部分は存在していても機能していないと

いうことも起こるでしょう。一人ひとりが、その与えられた賜物を用いて主に仕えることによって、初めて他の部分も健全に動けるし、身体全体が調和を保つのです。

ある教会で、知的障害のある人が、何年間も忠実にその教会に通っていて、彼はその忠実さから、教会の戸の開け閉めの鍵をまかされているということを聞きました。その兄弟は、他の誰にもできないこと、とてつもない重大な責任を担っています。鍵を開け閉めするという行為はとても簡単ですが、毎週、だれよりも早く来て、だれよりも遅く出ていくことを意味しますね。これ、そう簡単にできないです。いや、ほとんどの人ができないのではいでしょうか？とてつもない大事な働きであり、賜物が生かされています。この方は、まるで、誰にも気づかれずに、心臓を動かしている自律神経のような働きをしていると言えます。また、祈りはとてつもない大きな働きですね。教会の縁の下の力持ちは、だれにも知られることなく、祈っている人々だと思っています。私たちがここで日曜日に、礼拝を献げること、私たちの教会のために祈っている人々がアメリカにもいます。だれが祈っているかさえ、私たちのほとんどは知らないのではないのでしょうか？弱く見える部分ほど、実はなくてはならないものなのです。

4B 配慮し合う部分 23-27

²³また私たちは、からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を、見栄えをよくするものでおおいませう。こうして、見苦しい部分はもっと良い格好になりますが、²⁴ 格好の良い部分はその必要がありません。神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わせられました。

ここの「見栄えをよくするものでおおいませう」の訳は、以前の新改訳ですと、「いっそうの尊敬をもって」と訳されています。今の 2017 も、下の引照の部分にその訳があります。例えば、先の足と顔では、見栄えは顔のほうがいいですね。私たちは足を見て、見比べることはありません。また目と手であれば、目のほうが見栄えがよいもので、手を見比べることはあまりありません。けれども、足は欠かせないものですから、かえてその部分を尊びますね。足の親指は見た目がよくありませんが、親指がなければどれだけ歩くのに苦労するでしょうか。私たちの生きている、能力や見た目重視の世の中では、そういった見栄えのよいところばかりに注目が行きますが、身体の器官は自己主張や競争をしないものです。お互いに配慮して、一つのからだとして機能します。

そして、新改訳 2017 のような訳であれば、「見栄えをよくするものでおおいませう」というのは、何なのか？ということになります。ある注解書には性器とありました。私はどうも、それは文章に合わないなと思って、目や頭の話のパウロが例えで使っていたので、もっと内部にある体の部分ではないか？と思いました。つまり、目は私たちが見えるところにありますが、その裏には頭蓋骨があります。そして、もっと内側には脳があります。どんなにきれいな女優さんのような美しい女性も、その目や鼻、口などの見栄えがいいですが、レントゲンで頭蓋骨を見たら、美人とか全く関係なく、

等しく見栄えのよくないものです。ましてや、頭蓋骨が覆っている脳は、まあ、医学の興味のあるような人でなければ、ずっと見つめていようとは思いません。けれども、どれほど大切なものかは、言うまでもありません。頭蓋骨がなければ、生きられないのですから。脳がなければ、そもそも、生きません。けれども、それを顔の皮膚が覆い、また目など見栄えのあるもので、見苦しい部分は覆われ、それでよい恰好になっています。いずれの訳にしても、次のことが言えるのです。

²⁵ それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。

これが、身体の不思議、神秘です。全体が一つとして機能しています。各部分が、互いに配慮することによって絶妙にバランスを保っています。どれ一つ自己主張しません。そのように神が造っておられるからですね。それと、教会、キリストのからだは同じだということです。これで、お分かりになるでしょう。賜物を持ち上げる傾向、賜物中心に教会が動けば、教会として不健康になっていきます。いろんなところに支障が出てきます。

²⁶ 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

これが、教会の醍醐味と言ってよいでしょう。もはや、仲間の兄弟また姉妹の苦しみは自分の苦しみとなります。教会全体の苦しみとなります。ああ、あの人は苦しんでいる。けれども、自分には関係ないことだ。いや、関わったら面倒になる、とかならないのです。相手が苦しんでいるのを見たら、自分も痛むのです。それは、身体はどこかが痛めば、身体全体がその痛みに合わせて動き始めるのと同じです。また、仲間が尊ばれば、全体が喜びます。教会において、妬んだり、うらやんだりする人がいたら、本当に滑稽なことです。そうではなく、まるで自分のことのように喜ぶのです。それぞれがつながっているのです。

3A 神の備えた人々 27-31

1B 偏らない賜物 27-30

²⁷ あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。²⁸ 神は教会の中に、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして力あるわざ、そして癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言を備えてくださいました。

パウロは、エペソ人への手紙 4 章でも、同じようにキリストが、使徒、預言者、伝道者、そして牧師また教師を立てた、ということをお話しています。教会で、聖徒たちを奉仕の働きに整えるために、立てられている人々です。ここの箇所でも、第一に、第二に、そして第三にとして、教会に神が指導する人々を立てたことを書いています。教会によっては、みな万人祭司なのだから、牧師制度は要らないとするところがあります。私は、これは間違いだと思います。牧師だけが奉仕をする

という偏りについての問題の指摘ならば、全くその通りです。全ての人々に賜物が与えられており、ひとりひとりがそれを用いないといけません。何らかの奉仕に携わるのです。けれども、次に出てきますが、すべての人にその賜物が与えられているのではないのです。牧者の賜物が与えられている人がいて、祈り、またみことばを教えるのに従事できる、召しと賜物が与えられているからこそ、教会が健全に育つことができます。

そして、その他の賜物も用いるように、いろいろな人々を立てています。力あるわざを行なう人もいるし、癒しの賜物が与えられている人々もいます。また援助する人もいますね。これは、貧しい人や弱い人を助けるような人々、憐れみを示す人々です。そして管理する人々は、会計のことであるとか、教会の運営について管理する人々です。そして、各々の異言があります。この異言については、じっくりとパウロは 14 章で教えます。異言の濫用がコリントで起こっていました。

²⁹ 皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。すべてが力あるわざでしょうか。³⁰ 皆が癒やしの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がその解き明かしをするでしょうか。

神に立てられた指導者がいて、また、それぞれの賜物を用いている人々がいます。もしかしたら、ここに列挙されているのは、すべて見栄えのよい賜物かもしれません。指導者の賜物があり、それから、力あるわざ、癒し、そして異言やその解き明かしです。けれども、それらを求めて、それらばかりに注目するのは、どうなんですか？とパウロは問いかけています。そこでこう問いかけます。

2B よりすぐれた賜物 31

³¹ あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。私は今、はるかにまさる道を示しましょう。

賜物を求めるなら、「よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」と言っています。何をもって、よりすぐれているのか？パウロは、言い換えています、「はるかにまさる道を示しましょう」と。13章に、このはるかにまさる道とは、愛であることを教えています。互いに配慮すること、自分の益ではなく他者の益を求めること。全体の益のために与えられる賜物。知識は高ぶらせるが、愛は人を育て上げること。こうしたことが、はるかにまさる道であり、その中で賜物を熱心に求めることが、「よりすぐれた賜物を求める」ことなのです。14章では、具体的に、異言以上に預言を求めなさいと言っています。預言によって、人々の徳が高められ、また悔い改めに導かれるけれども、異言では自分の徳は高められても、公の礼拝では預言が優れていることを話していきます。

霊的な幼さから脱皮して、成長して大人になりなさいというのが、パウロが基本、コリントの人たちに教えていることです。私たちの教会も、一步、一步、自分がキリストのからだとして成長する喜びをますます知っていくことができるよう、祈ります。